戰士諸君考へよ!!此の慘事を招致したのは誰の罪であらう。ヒトラー、ムツソリニーの如き狂人の前に叩頭して、對米英開戰不可避の因をなしたのは軍閥ではなかつたか？帝國憲法を足の下に蹂みにじり提れ多くも天皇陛下の平和を望む御宸念にさへ叛いた軍閥ではないか。

諸君の愛讀する「源平盛衰記」の開卷第一に

聽る者は久しからず春の夜の夢の如し
武き者必ず滅ぶ、風の前の塵の如し

と書いてある。聽る軍閥は夢の如く消える。武力をのみ頼みたる軍閥は風前の塵の如く滅ぶ。

敢て問ふ。斯る軍閥と心中するか？

日本の勇敢なる戰士諸君！

諸君が故國の「ミヤコ」を去つてより、年移り、月變る事幾度ぞ。戰場に砲聲響く止み、諸君が銃を横たへて休息する時、空飛ぶ鳥、又梢に鳴く鳥を見るならば「あゝ、あの鳥は日本から飛んで來たのならば、都にある我が最愛の父母、妻子、兄弟、姉妹は未だ生きて居るのかと尋ねて見度い」と思ふであらう。

諸君の父母、妻子、兄弟、姉妹は日夜諸君の安否を心配し、思案に暮れて居るのみならず、食料品の缺乏、物價の騰貴、高い稅金に苦しんでゐる。けれど命だけは無事で暮して居るであらう。

然り、日本に居る諸君の最愛の人達は今までは無事であつたけれども彼等の無事な時は此の先長く續かぬ。彼等の上に時々刻々、危險は迫りつゝある。遠からず彼等の命は風前の燈の如くはかなきものとなるであらう。

既に八幡、佐世保、長崎、大村、東京、名古屋其の他の軍事地點は去る六月十六日以來度々爆擊されてゐる。

かゝる時何人か諸君の父母、妻子、兄弟、姉妹の安全を保證し得るものぞ。

斯る爆擊が如何に悲慘なものであるかは伯林を始め獨逸の主要都市の被つた爆彈の洗禮を見れば明らかである。伯林のみの空襲でも既に百三十回に及んで居る。千機以上の空中大編隊は日夜來襲し、一度に約二千噸の爆彈を投下し以て伯林を焦熱地獄と化した。ハンブルグ、ハノーバー、マンハイム、ケルン等獨逸の主要工業都市は悉く同樣の悲運に際會した。

思へ此の聯合國空軍が全力を日本に移す時はどうなるであらう。數萬噸の爆彈や燒夷彈が日本にばらまかれたら、木造の日本、防火設備のない日本はどうなるか？空襲下に諸君の最愛なる人達は軒端に設けた蟻壕に飛び込む外はなく、果してそれで安全が期せられるであらうか？

勿論人道を重んずる聯合國は悲慘なる空襲を繰り返す事を好むものにあらず。けれども非道狂暴の軍閥を倒して、日本を救はんが爲には、涙を呑んで此の悲慘な戰法は繰り返されるものである。